

エジプトでの現地調査（2024年12月22日）報告書

カイロ日本人学校におけるインタビュー活動

名古屋学院大学 天野幸輔

2024年12月22日（日）午後の児童生徒下校後に、カイロ日本人学校において、福島校長先生と森下教頭先生に1時間弱のインタビューを行うことができた。この活動は、EDU-Port ニッポン「特別活動の国際化と質保証に関する研究」における“プロジェクトD”の目的を遂行するために行われた。以下にその一端を報告する。

1 “プロジェクトD”の活動目的

カイロ日本人学校（CJS）とエジプト日本学校（EJS）との間で、小学校教師の交流会を実施する。Tokkatsu に対する理解を深めるとともに、合同の学校行事（学芸会や運動会）や保護者交流の可能性について議論する。一連のプロセスから、日本型教育の発展に向けた日本人学校と現地校との協力体制をモデル化する。

2 インタビュー実施に至る経緯

これまでインタビューや意見聴取を複数の教諭に、また一部の方々には複数回実施してきた。2023年には、学級活動の模擬授業を通じたカイロ日本人学校教師とエジプト日本学校の交流活動後、現役のカイロ日本人学校教師2名へのインタビューを実施した。また同年4月に帰国して、公立小学校勤務となった教諭にも、当プロジェクトのメンバーに加わっていただき、チーム会議の都度、意見を求めたり、学校の様子を直接聞いたりしてきた。

今回はそれに加え、活動目的を実現するうえで不可欠な管理職へのインタビューを構想した。依頼の初期段階では、現地の様子などから困難が予想された。しかし日本側連携機関として、エジプト側との連絡・調整を担ってきた株式会社パデコの協力により、直前に実施が決定した。エジプトでは金曜と土曜が休日であるため、校長と教頭のご厚意により、日曜の午後に児童生徒が下校した後で実施されることとなった。短時間ということではあったが、1時間弱にわたりお話をうかがうことができた。

終了後には、校舎内をご案内いただくことができ、児童生徒の学習環境を実際に見ることができた。このこともインタビューに劣らず価値のあることであった。激務の中を時間を割いてくださった管理職の先生方、コーディネートの労をお執りいただいた瀬戸口氏（パデコ）、学校までご同行いただいた田原氏（パデコ）には、この場を借りて厚く感謝したい。

3 インタビューの実際

校長室にて、京免（EDU-Portにおける本研究の全体統括、プロジェクトCリーダー）と天野（プロ

ジェクト D リーダー) がインタビューを行った。

実施前に研究倫理の説明と確認が行われ、管理職 2 名から同意の署名を得た。渡航前に D チーム内で検討した質問項目は、以下の通りである。

- ・エジプトが、日本の教育課程を導入していることをどうとらえていますか。
- ・日本人学校としてどのような役割を担っていこうと考えていますか。
- ・実際にどのようなことを行っていますか。
- ・役割を果たすうえで障壁になっていることは何ですか。
- ・その解決方法はどのようなものでしょうか。実際行っている解決への道筋や実践がありましたら教えてください。
- ・CJS の先生方は EJS の特活の授業を、どの程度参観されているでしょうか。
- ・参観後、授業や学級指導に、どのように生かしているとお感じでしょうか。またそれはなぜでしょうか。
- ・教育を通じた文化の侵略にならないようにするうえで、大切にされていること、大切になさりたいことはどのようなことでしょうか

一見してわかる通り、全てにお答えいただくにはおおよそ 90 分を要する内容である。事前に、場に応じて濃淡をつけたり、取捨選択を行ったりする方針とした。

実際には、大変わかりやすい資料をあらかじめご準備して下さったため、まずはその内容について約 20 分の説明をいただいた。そのこともあり、重複する質問は避けて行われた。「カイロ日本人学校と EJS との交流の歩み (3 年間)」と題する資料は、大変価値のあるものである。以下にその内容を記載 (ママ) する。なおこの時点での予定も含まれている。また令和 5 年 9 月の記載中の「EDU-Port 関係者 (オンライン)」とは、本研究にかかわるメンバーが日本からオンライン参加したことを意味する。



左より森下氏 (カイロ日本人学校)、京免、天野、田原氏 (パデコ)、福島氏 (カイロ日本人学校)

表 カイロ日本人学校と EJS との交流の歩み（3 年間）

実施時期	交流内容
令和 4 年 4 月	カイロ日本人学校・JICA エジプト事務所・プロジェクト専門家にてオンライン会議を実施。JICA よりエジプト教育省と相談の結果、EJS Industrial Zone 校と交流することが決定。
令和 4 年 5 月	カイロ日本人学校にて縦割りの特別活動「なかよしランチ」に EJS Industrial Zone 校の校長、教員、エジプト教育省特活プロジェクト担当を招待。学校紹介や今後の交流について質疑応答や意見交換を実施。
令和 4 年 5 月	EJS Industrial Zone 校にカイロ日本人学校教員 3 名が訪問する。学校参観及び今後の児童生徒の交流について意見交換を実施。
令和 4 年 6 月	カイロ日本人学校中学生職場体験で生徒 1 名が EJS を訪問。EJS 海外協力隊員にインタビュー実施。
令和 4 年 9 月	カイロ日本人学校開放日にて校長から EJS スーパーバイザーへ朝顔とへちまの種を贈与。
令和 4 年 10 月	カイロ日本人学校運動会に EJS Industrial Zone 校の児童を招待。開会式、徒競走、綱引き、玉入れに参加。
令和 4 年 11 月	カイロ日本人学校ジャパンデーに EJS Industrial Zone 校の児童を招待。折り紙やカルタなど日本文化の紹介や体験を通じた交流を実施。
令和 5 年 5 月	EJS Industrial Zone 校の卒業発表会にカイロ日本人学校校長、教頭、国際理解教育担当が参加。
令和 5 年 9 月	カイロ日本人学校において特別活動研究授業を実施。3 校の EJS 教員、エジプト教育省関係者、JICA 職員、EDU-Port 関係者（オンライン）が参観。外部講師（サラヤ株式会社）との T・T での手洗いの大切さと方法を学ぶ授業を実施。授業後に意見交換。
令和 5 年 9 月	カイロ日本人学校中学生職場体験で生徒 1 名が EJS を訪問。EJS 海外協力隊員にインタビューを実施。
令和 5 年 11 月	カイロ日本人学校運動会に EJS Industrial Zone 校の児童を招待。開会式、徒競走、綱引き、玉入れに参加。
令和 5 年 12 月	EJS Industrial Zone 校にて EDU-Port 事業としてカイロ日本人学校教員と EJS Industrial Zone 校教員が模擬授業と意見交換。
令和 6 年 1 月	カイロ日本人学校ジャパンデーに EJS Industrial Zone 校の児童を招待。餅つきや折り紙や習字など日本文化の紹介や体験を通じた交流を実施。
令和 6 年 2 月	EJS Industrial Zone 校にて、カイロ日本人学校教員が朝の会、掃除の様子、TOKKATSU の授業を参観。EJS Industrial Zone 校の教員と意見交換を実施。
令和 6 年 3 月	カイロ日本人学校の卒業式に EJS Industrial Zone 校校長及びスーパーバイザーを来賓として招待。
令和 6 年 4 月	カイロ日本人学校の入学式に EJS Industrial Zone 校校長及びスーパーバイザーを来賓として招待。
令和 6 年 6 月	EJS Industrial Zone 校の卒業式にカイロ日本人学校校長、教頭、交流担当教員

	が出席。
令和6年9月	カイロ日本人学校の学校開放日に EJS Industrial Zone 校校長、教員が授業見学。
令和6年9月	EJS Industrial Zone 校の入学式にカイロ日本人学校校長が出席。
令和6年9月	カイロ日本人学校の特別活動の取組（なかよしの日）を EJS Industrial Zone 校教員が授業見学。
令和6年10月	カイロ日本人学校の運動会リハーサルに EJS Industrial Zone 校児童と教員が参加。
令和6年10月	カイロ日本人学校の運動会に EJS Industrial Zone 校児童と教員が参加。入場行進、開会式、短距離走、玉入れ、綱引きに出場。
令和6年10月	EJS Industrial Zone 校をカイロ日本人学校全校児童生徒及び教員が訪問し、交流会を実施。
令和6年12月	カイロ日本人学校の学習発表会に EJS Industrial Zone 校校長、教員が視察。
令和6年12月	EJS Industrial Zone 校をカイロ日本人学校校長、教員が訪問し、「TOKKATSU」の授業参観及び意見交換会を実施。
令和7年2月	カイロ日本人学校のジャパンデーに EJS Industrial Zone 校校長、教諭、児童が参加し交流する。
令和7年3月	カイロ日本人学校の卒業式に EJS Industrial Zone 校校長及びスーパーバイザーを来賓として招待。

日本人学校では、現地理解教育や国際理解教育が数多く実施されている。それに加えて、表のように交流活動を盛んに開催したことは、職員のかかなりの労力と尽力を想像させるに十分である。また交流の内容から、その中心に特別活動（TOKKATSU）が据えられていることがわかる。

インタビューの詳細は稿を改めて報告するが、その中で注目すべき点のいくつかについて、以下に示す。

4 モデル化へのヒントとなる語り（部分）

まずは日本人学校での実践が、保護者に理解を得て、いわば地に足がついたものにならないと、交流以前の問題となってしまう。そのことに改めて気づかされた語りがあった。インタビュー前日に保護者からの声があったとのことであった。以下に概略を示す。

特別活動と EJS 交流のことを資料とともに3分作らせて、特別活動を説明した。保護者はこれまでも見てきているので教科はわかる。例えば学級会の様子とか、何のためにそれをするのか、特活のねらいを説明した。例えば簡単に言えば「集団ですよ」「自主的にやって実践的なものなんですよ」「いろんな効果がありますよ」と。実は行事多いですねっていう声もあるが、この行事というのはこのねらいで、入学式からこういろんなのが、こうあると。「それは儀式的な行事なんですよ」「遠足だったら遠足・集団宿泊的行事ですよ」「これは健康的なもの、これは勤労的なのですよ、文化的なのですよ」「この一年間通して計画的にやっています」と示した。具体的に「なかよしの日」をどういうふうにやってるか、「なかよしタイム」はこんなふうに、「なかよしクラブ」はこんなに行っているというのを説明した。これまでの取り組みの様子も簡単にまとめたものを作って、活動内容をお知らせし

た。感想を書いてもらったが、「非常にこの説明で今、学校が取り組んでいることがよくわかった」と。保護者には学校評価を行っていただくが、今までは、「目的はわからなくて見てるので評価できない」とも言われてきた。今回はこういうことを通して学校評価も書きやすくなるということである。個々の活動については保護者にどう映ったか、どう捉えたかというのを学校運営の方にも反映させていきたいと考える。

日本人学校における特別活動は、まずは児童生徒のために行われるものである。しかし保護者には特別活動は捉えづらい存在でもある。学校開放日や学習発表会など、保護者が来校する場でていねいな説明が、特別活動に対する保護者の理解を促進したと言える。翻って考えれば、同様のことは日本国内でも十分に参考になると言えるだろう。

英語教育や現地理解教育など、日本人学校の保護者の学校側への要求は高い、とよく耳にする。しかしまずは教育課程の重要な部分を占める特別活動に、保護者は注目している。「行事が多い」という声も、説明を行ってその教育的な意義に理解を得られれば、積極的な学校評価への協力に変わっていくよい例と言えるであろう。

エジプトが特別活動を取り入れたことで、カイロ日本人学校とエジプト日本学校との間に、共通の教育課程が生まれた。このことは、他の国々の日本人学校と例えば現地校との交流と比較して、大きな相違点と言えるであろう。では単に共通の教育課程が存在すれば、日本人学校は現地の学校に影響を与えられるのであろうか。

校長と教頭は、EJS の卒業式に複数回参加している。そこで目にした様子を、以下のように語っている。

特活の導入は、エジプトの教員のスタンス発想が転換される機会であったと感じている。日本もそうであったが、エジプトでは先生は「教えるもの」である。先生が言った通りに進めていく。2年見ていただけでも卒業式の様子も校長先生が全部仕切ってやっていたのが、今年は子どもたちにやらせていた。全てではないが、子どもたちは主体になってやっているとことがあり、先生方の発想の転換に対して、日本の教育が大きな影響を与えたのではないか。そのところであの、スーパーバイザーの先生はご苦労をなさっている。その点がすごく私は大事ではないか、と思っている。

やはり管理職の目には、単にエジプト人教師の努力だけでなく、日本人のスーパーバイザーの存在が映っていたようである。立場を置き換えれば容易に想像がつくが、日本側が別の国の教育課程をトップダウンで取り入れることになったら、かなりの困難と混乱が起きることだろう。エジプト日本学校に通い、通訳を介すとはいえ言葉の壁を越えながら、異国に日本の教育課程を伝えるだけではなく、授業として成立するところまで指導しているのである。

このことを、日本人学校と現地校との交流に置き換えて考えてみたい。多くの日本人学校は、その使命として、また保護者からの要望としても現地理解教育を推進する。その一つとして児童生徒の現地校との交流を実施し、その前提として教師間の交流が行われる。長年、交流を続けている学校が存在するところもある。しかし教師間の交流に絞って考えれば、派遣教師は長くとも4年で全員が入れ替わる。やはりその点で、表面的な違いの理解にとどまる交流が多いことだろう。教育課程の違いがどこから生まれるのか、その国の教育課程ならではの学びとはどのようなものなのか、といったところまでは掘り

下げられないのが実情であろう。以前には 2001 年から約 10 年間、ソウル日本人学校や上海日本人学校、ドバイ日本人学校、フランクフルト日本人学校など一部の日本人学校には、「在外教育施設国際交流ディレクター」が派遣されていた。再度、その活動を振り返るとともに、日本の教育課程のよさを伝えたり、異国の教育課程のより深い理解とともに、そこから当たり前になりすぎている日本の教育課程の意義を再評価したりできるような、新たな支援を担うポストの創設が必要であろう。

5 校内の学習環境について

インタビュー後、校内を案内していただいた。写真で紹介する。



【教室】日本と変わりなく、学ぶ雰囲気をも高める環境整備がなされている。



【掲示物】 共同スペースや教室内に特別活動に関連する、最新の様々な掲示物がある。